

信号処理論第一：第7回

信号処理のための複素関数論

東京大学 大学院情報理工学系研究科 システム情報学専攻

小山 翔一

講義の目的と概要

➤ 講義の目的

- 信号処理の基礎を習得する。

➤ 講義の概要

- 決定論的信号（確定的信号）に関する信号処理について、基礎事項を理解する。本講義では、できるだけ特定の応用分野に限らない、一般的な信号処理論について講義する。ただし、統計的信号処理については扱わず、信号処理論第二の範囲となる。

➤ キーワード

- Fourier級数, Fourier変換, 離散時間Fourier変換, 離散Fourier変換, FFT, 窓Fourier変換, 線形時不変システム, サンプリング定理, インパルス応答, 伝達関数, 周波数応答, 差分方程式, ブロック線図, 因果性, 安定性, FIRフィルタ, IIRフィルタ

講義スケジュール

➤ Sセメスター 金曜 1 限 (8:30-10:15) @オンライン

➤ 日程 (暫定版)

■ 4/ 9	第 1 回	}	小山 担当
■ 4/16	第 2 回		
■ 4/23	第 3 回		
■ 4/ 30	第 4 回		
■ 5/ 7	第 5 回		
■ 5/14	第 6 回		
■ 5/21	第 7 回		

■ 5/28	休講	}	堀崎 担当
■ 6/ 4	第 7 回		
■ 6/11	第 8 回		
■ 6/18	第 9 回		
■ 6/25	第 1 0 回		
■ 7/ 2	第 1 1 回		
■ 7/ 9	第 1 2 回		
■ 7/30	<u>学期末試験</u>		

オンライン講義の実施方法

- zoom (<https://zoom.us/>) を用いる。設定方法等についてはポータルサイト (<https://utelecon.github.io/oc/>) を参照すること。
- 講義のURLは前半・後半それぞれで毎回同じにする予定。後半(6/4)からはURLが変更となるので必ずITC-LMSを確認すること。
- 質問がある場合は、チャットに書き込む、あるいはミュートをオフにして音声で質問する、のいずれかの方法で行うこと。
- もしオンラインでの受講に不都合が生じた場合は、メール等で連絡すること。

shoichi_koyama@ipc.i.u-tokyo.ac.jp

horisaki@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

➤ 講義資料・動画

- ITC-LMSにアップロード
- 資料はできるだけ講義前日までにアップロードするようにします。

➤ 成績評価

- 学期末試験（暫定）
- 第7回（5/21）に小テストを実施する可能性あり

本日の目次

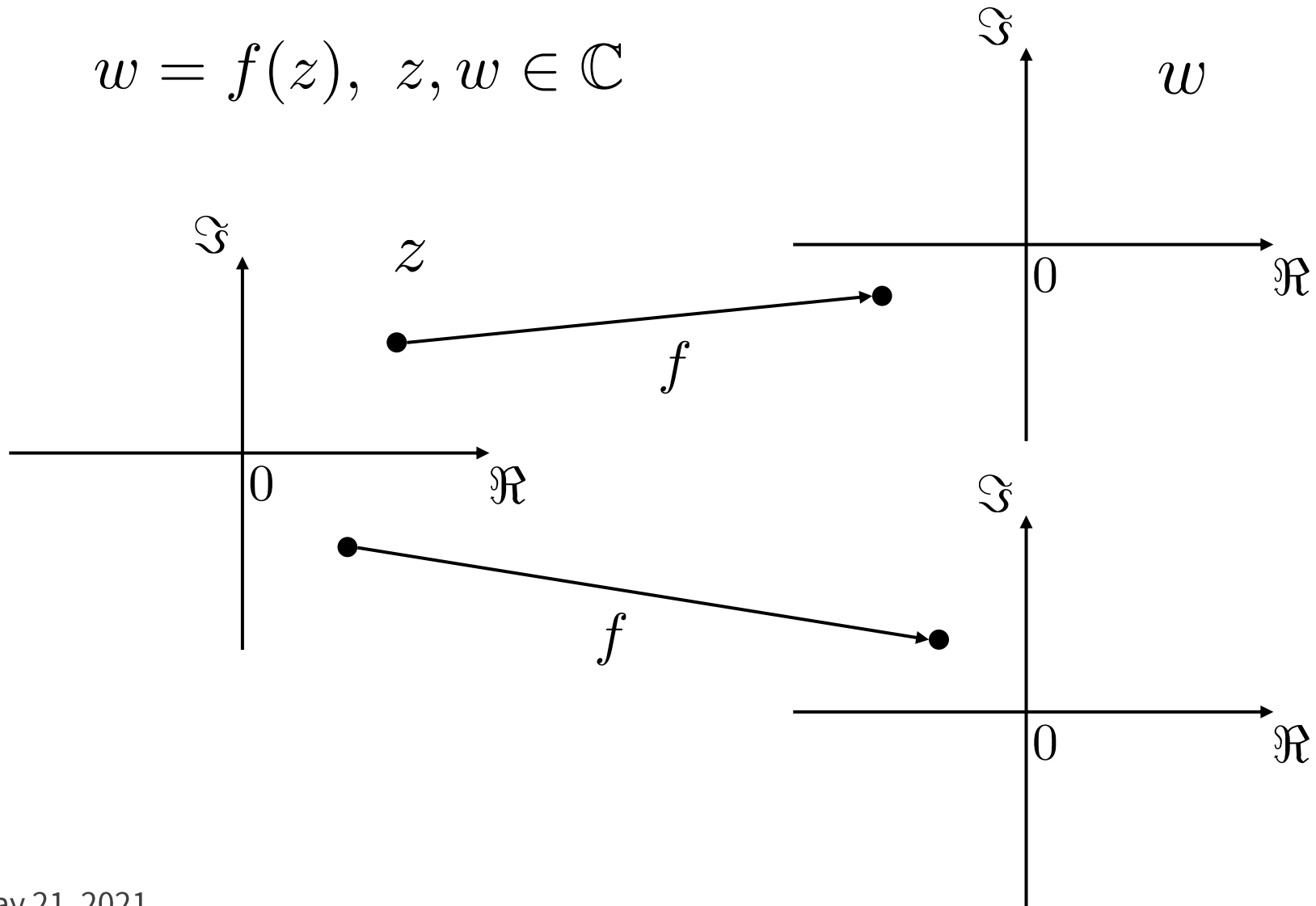
1. 信号処理のための複素関数論

信号処理のための複素関数論

複素関数

- 定義域 z と値域 w どちらも複素数の関数 f

$$w = f(z), \quad z, w \in \mathbb{C}$$



直線と円

➤ 直線の方程式

xy 平面上では, $\alpha, \beta, \gamma \in \mathbb{R}$ を用いて,

$$\alpha x + \beta y + \gamma = 0$$

z 平面上では, $z = x + jy$ より,

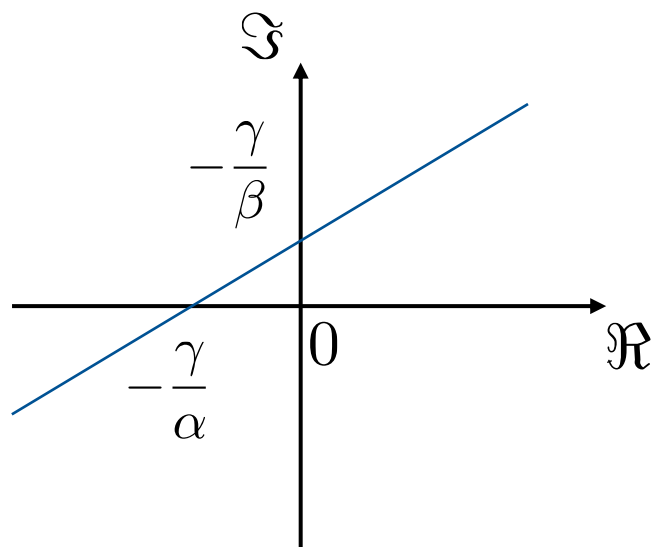
$$\begin{cases} x = \frac{z + z^*}{2} & (\text{実軸}) \\ y = \frac{z - z^*}{2j} & (\text{虚軸}) \end{cases}$$

$$\alpha \frac{z + z^*}{2} + \beta \frac{z - z^*}{2j} + \gamma = 0$$

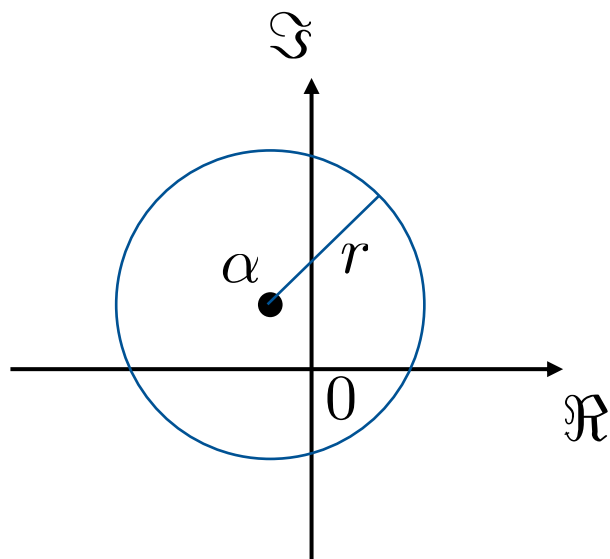
$$\Rightarrow \frac{\alpha - \beta j}{2} z + \frac{\alpha + \beta j}{2} z^* + \gamma = 0$$

となるので, 以下のような形になる

$$b^* z + b z^* + c = 0$$



➤ 円の方程式



$\alpha \in \mathbb{C}, r \in \mathbb{R}$ を用いて,

$$|z - \alpha| = r$$

$$(z - \alpha)(z - \alpha)^* = r^2$$

$$\Rightarrow |z|^2 - \alpha^* z - \alpha z^* + |\alpha|^2 - r^2 = 0$$

➤ 直線と円の方程式の一般形

$$a|z|^2 - b^*z - bz^* + c = 0$$

$$(a, c \in \mathbb{R}, |b|^2 \geq ac)$$

- 直線： $a = 0$
- 円： $a \neq 0$
- 直線は無限遠点を通る円と考える

複素一次変換 (Möbius変換)

➤ 複素平面上での1次分数関数を用いた変換

$$w = \frac{az + b}{cz + d}, \quad (ad - bc \neq 0)$$

➤ なぜ一次変換？

$$\begin{aligned} w &= \frac{az + b}{cz + d} \\ &= \frac{(bc - ad)/c^2}{z + d/c} + \frac{a}{c} \end{aligned}$$



3つの基本的な変換の
組み合わせ

1) $z_1 = z + \frac{d}{c}$ 平行移動

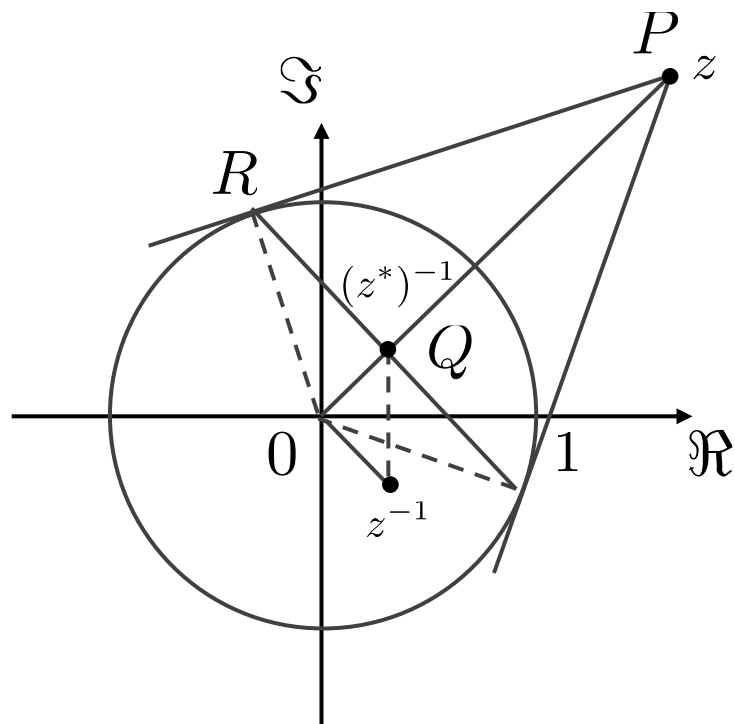
2) $z_2 = \frac{1}{z_1}$ 反転

3) $z_3 = \frac{bc - ad}{c^2} z_2$ 拡大縮小・回転

4) $w = z_3 + \frac{a}{c}$ 平行移動

複素一次変換 (Möbius変換)

➤ 3つの変換のうち反転について,



$\triangle ORQ$ と $\triangle OPR$ が相似であるから,

$$\frac{\overline{OQ}}{\overline{OR}} = \frac{\overline{OR}}{\overline{OP}} \quad \Rightarrow \quad \overline{OQ} \cdot \overline{OP} = 1$$

$\overline{OR} = 1$

$z \rightarrow z^{-1}$ は, 単位円に対する鏡像位置に移し, さらに実軸に対称位置に移す

複素一次変換 (Möbius変換)

➤ 直線または円の方程式の反転は,

$$|z|^2 - \alpha^* z - \alpha z^* + |\alpha|^2 - r^2 = 0$$

 $z \rightarrow z^{-1}$

$$|z^{-1}|^2 - \alpha^* z^{-1} - \alpha (z^{-1})^* + |\alpha|^2 - r^2 = 0$$

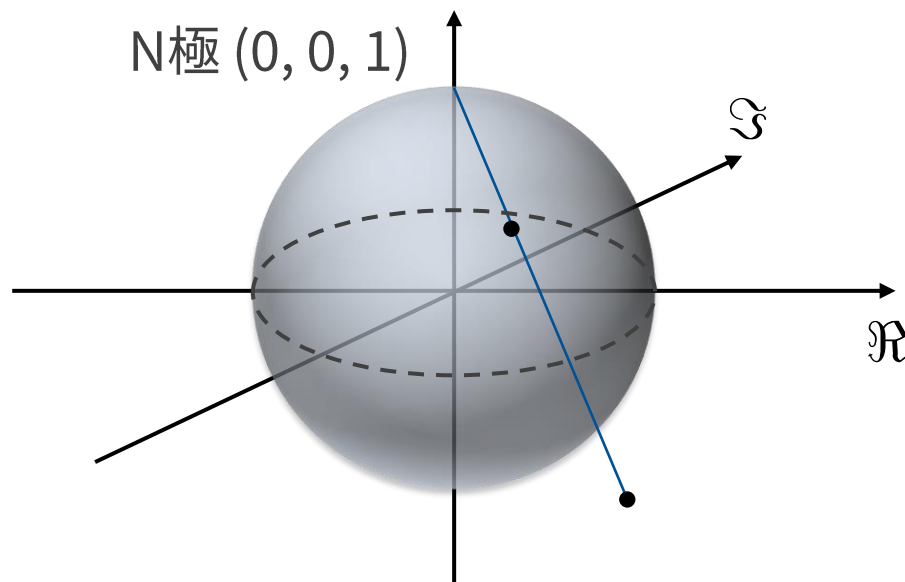
$$\Rightarrow (|\alpha|^2 - r^2)|z|^2 - \alpha^* z^* - \alpha z + 1 = 0$$

直線または円の方程式

- (平行移動・拡大縮小・回転も含めた) 複素一次変換は, 円を円に写す (円-円対応)
 - 直線→円や円→直線も含む, Riemann球面上で考えてもよい
- 複素一次変換は等角写像 (2つの曲線のなす角が保存される)

Riemann球面

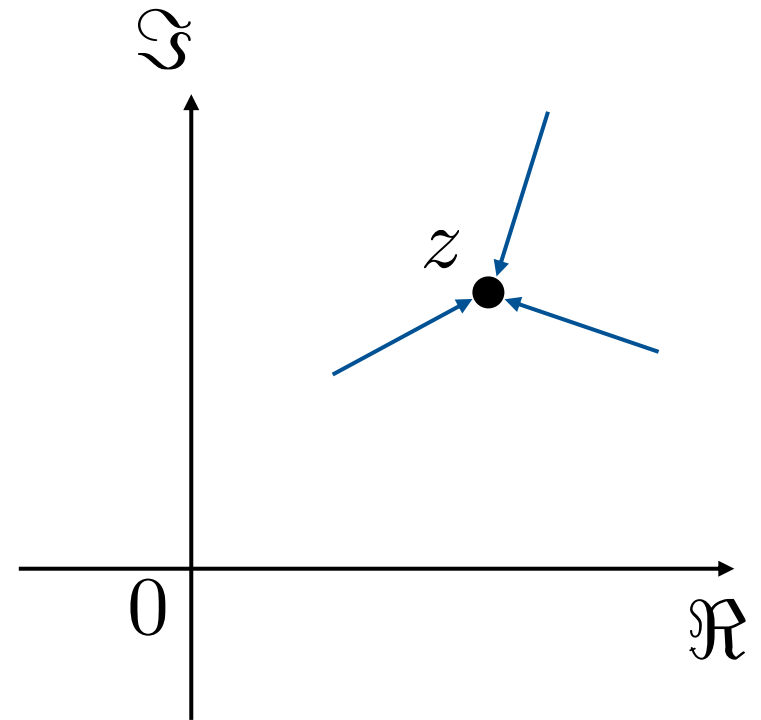
- Riemann球面：3次元空間において，z平面の原点を中心とする半径1の球を考える。
- 立体射影：z平面上の点を，その点とRiemann球面のN極とを結ぶ直線がRiemann球面と交わる点に写す1対1の射影
 - N極は複素平面における無限遠に対応し， $\mathbb{C} \cup \{\infty\}$ を拡張複素平面と呼ぶ
 - S極は原点，赤道は単位円に対応
 - z平面上の円（直線含む）は，Riemann球面上でも円となる



複素関数の微分

- 実関数の微分と定義は同じだが、どこから近づいても同じ極限に収束しなければならない

$$f'(z) = \lim_{\Delta z \rightarrow 0} \frac{f(z + \Delta z) - f(z)}{\Delta z}$$



Cauchy-Riemannの関係式

- 複素関数 $w = f(z)$ が領域 D で微分可能であるとき、 w は領域 D で正則（あるいは解析的）であるという。

➡ w が領域 D で正則であるための必要十分条件

- $w = u(x, y) + jv(x, y)$, $z = x + jy$
 - 微小量 Δz に対する関数値の変化 $\Delta f(z) = f(z + \Delta z) - f(z)$

$$\Delta f = \Delta u + j\Delta v$$

$$= \frac{\partial u}{\partial x} \Delta x + \frac{\partial u}{\partial y} \Delta y + j \left(\frac{\partial v}{\partial x} \Delta x + \frac{\partial v}{\partial y} \Delta y \right)$$

$$= \left(\frac{\partial u}{\partial x} + j \frac{\partial v}{\partial x} \right) \Delta x + \left(\frac{\partial u}{\partial y} + j \frac{\partial v}{\partial y} \right) \Delta y$$

- $\Delta x, \Delta y$ に非依存となるには,

$$\frac{\partial u}{\partial x} = \frac{\partial v}{\partial y}, \quad \frac{\partial v}{\partial x} = -\frac{\partial u}{\partial y} \quad : \text{Cauchy-Riemannの関係式}$$

複素関数の微分

➤ 正則な関数の例

$$z^n, z^{-n}, \sin z, \cos z, \exp z, \log z$$

➡ 実関数と同じように微分すればよい $\frac{d}{dz} z^n = n z^{n-1}$

➤ (意外に) 正則でない関数の例

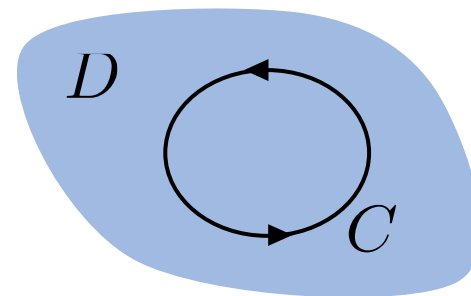
$$z^*$$

- 複素関数を z と z^* の 2 変数関数と見たとき, 正則な関数は z だけの関数になっている

Cauchyの積分定理

- 領域 D で正則な複素関数 $f(z)$ について、領域 D に含まれる単一閉曲線 C での $f(z)$ の周回積分は0となる。

$$\oint_C f(z) dz = 0$$



Proof:

$$\begin{aligned}\oint_C f(z) dz &= \oint_C (u + jv)(dx + jdy) \\ &= \oint_C (u dx - v dy) + j \oint_C (v dx + u dy) \\ &= - \iint_S \left(\frac{\partial u}{\partial y} + \frac{\partial v}{\partial x} \right) dx dy + j \iint_S \left(\frac{\partial u}{\partial x} - \frac{\partial v}{\partial y} \right) dx dy \\ &= 0\end{aligned}$$

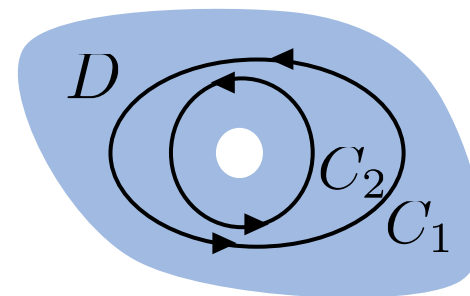
Greenの定理

Cauchy-Riemannの関係式

Cauchyの積分定理

- 非正則な領域を一つ含む場合，複素積分は自明に0とはならないが，積分値は積分路の選び方によらない。

$$\oint_{C_1} f(z)dz = \oint_{C_2} f(z)dz$$



- 正則でない点を特異点と呼ぶ
- ある特異点を中心とする十分小さい円を描いたとき，その内部にそれ以外の特異点がないとき，孤立特異点と呼ぶ

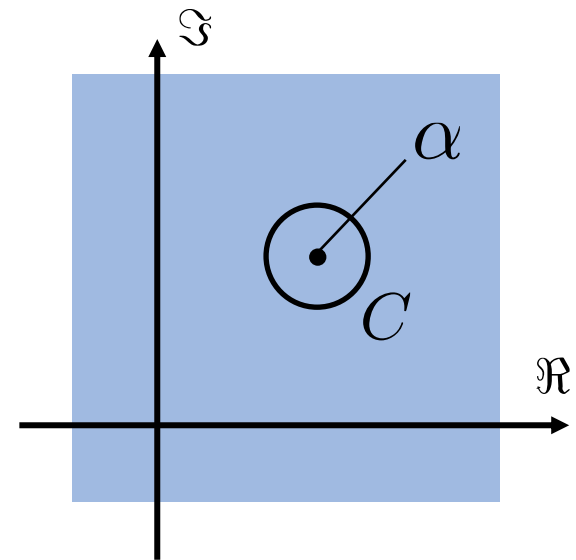
Cauchyの積分定理

➤ 例： $z = \alpha$ にのみ特異点を持つ関数の複素積分

$$\oint_C \frac{1}{(z - \alpha)^n} dz$$

– 積分路 C : $z = \alpha + r \exp(j\theta)$, $\theta \in [0, 2\pi)$ とする。

$$\begin{aligned} \oint_C \frac{1}{(z - \alpha)^n} dz &= \int_0^{2\pi} \frac{rj \exp(j\theta) d\theta}{(\alpha + r \exp(j\theta) - \alpha)^n} \\ &= \frac{j}{r^{n-1}} \int_0^{2\pi} \exp(-j(n-1)\theta) d\theta \\ &= \begin{cases} 0, & n \neq 1 \\ 2\pi j, & n = 1 \end{cases} \end{aligned}$$



Cauchyの積分公式

- 複素関数 $f(z)$ が閉経路 C 内において正則であるとき, C 内部の点 $\alpha \in \mathbb{C}$ について,

$$f(\alpha) = \frac{1}{2\pi j} \oint_C \frac{f(z)}{z - \alpha} dz$$

Proof:

$C : z = \alpha + r \exp(j\theta), \theta \in [0, 2\pi)$ として,

$$\begin{aligned} \oint_C \frac{f(z)}{z - \alpha} dz &= \int_0^{2\pi} \frac{f(\alpha + r \exp(j\theta))}{\cancel{\alpha + r \exp(j\theta)} - \cancel{\alpha}} \cdot \cancel{j r \exp(j\theta)} d\theta \\ &= j \int_0^{2\pi} f(\alpha + r \exp(j\theta)) d\theta \end{aligned}$$

$r \rightarrow +0$ の極限を取れば,

$$j \int_0^{2\pi} f(\alpha) d\theta = 2\pi j f(\alpha)$$

Laurent級数展開

➤ 点 α 周りのTaylor級数展開

– 実関数の場合

$$f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n (x - \alpha)^n, \quad a_n = \frac{f^{(n)}(\alpha)}{n!}$$

– 複素関数の場合

$$f(z) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n (z - \alpha)^n, \quad a_n = \frac{f^{(n)}(\alpha)}{n!} = \frac{1}{2\pi j} \oint_C \frac{f(z)}{(z - \alpha)^{n+1}} dz$$

Goursatの定理

➤ 複素関数 $f(z)$ の点 α 周りのLaurent級数展開

$$f(z) = \sum_{n=-\infty}^{\infty} a_n (z - \alpha)^n, \quad a_n = \frac{f^{(n)}(\alpha)}{n!} = \frac{1}{2\pi j} \oint_C \frac{f(z)}{(z - \alpha)^{n+1}} dz$$

– α が孤立特異点のときのみLaurent級数に負のべきの項が生じる。

留数と留数定理

➤ $f(z)$ の孤立特異点 $z = \alpha$ における留数の定義

$$\text{Res}(\alpha) = \frac{1}{2\pi j} \oint_C f(z) dz$$

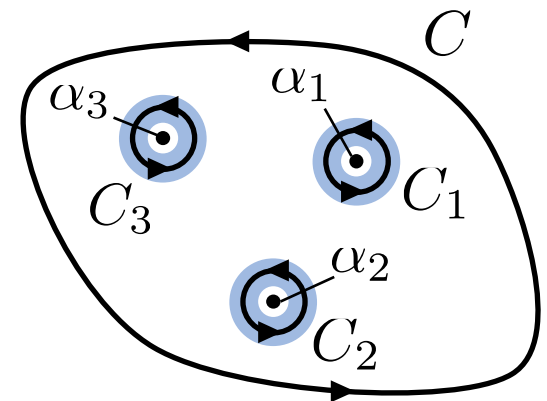
– Laurent級数展開との関係

$$\text{Res}(\alpha) = a_{-1}$$

留数は $n=-1$ の項の係数に対応

➤ 留数定理：留数が複数個存在

$$\oint_C f(z) dz = 2\pi j \sum_k \text{Res}(\alpha_k)$$



参考文献

1. 眞溪歩, "ディジタル信号処理工学," 昭晃堂, 2004.
2. M. Vetterli, J. Kovačević, and V. K. Goyal, "Foundations of Signal Processing," Cambridge University Press, 2014.
3. 藤原毅夫, “東京大学工学教程 複素関数論I,” 丸善出版, 2013.